

奨励研究報告書

研究課題

三井高祐とその周辺の茶の湯について

和歌山県立文書館 嘱託研究員

砂川 佳子

はじめに

本研究では、三井文庫所蔵の古文書から、三井高祐とその周辺における茶の湯について、実態を明らかにすることを目的とする。三井家は、紀州藩領伊勢松坂を出身とする呉服商・両替商であった。そのため、紀州藩とその家臣である表千家とは、早くから関係があり、今回対象とする高祐と三井同族も茶の湯に執心していたことが知られている。

しかし、三井家における茶の湯は、三井文庫・同美術館で所蔵する茶道具を中心に語られることが多く、三井文庫から刊行された『三井家文化人名録』<sup>1</sup>のなかで、「茶の湯」の項が立てられ、人物ごとに簡単に紹介されるに過ぎなかった。そこで本研究では、三井家の当主である十代八郎右衛門として紀州藩御用をつとめた、北家四代の高祐（宝暦九年へ一七五九）〜天保九年（一八三八）に着目する。高祐は、茶の湯を表千家八代啐啄齋に入門後、九代了々齋、十代吸江齋に師事した、当時の豪商を代表する茶人であった。

三井文庫には、近世から現代に至る店の経営資料のみならず、茶会記や茶書・日記・書状など、個人の趣味や日常に関わるものが残されている。これらを調査し翻刻することによって、近世後期における豪商の茶の湯について位置付ける手がかりとなると考えた。

## 一、史料の概要

三井文庫本館は、江戸時代中期以降の三井家（越後屋呉服店・三井両替店）の古文書類と明治以降の三井系企業の経営資料一〇万点を所蔵する。そのうち、三井家編纂室が収集し『三井家記録文書目録』として整理されている史料群は、ホームページ上で公開されている<sup>2</sup>。そのほか、本家・連家に所蔵されていた家政史料が伝来しており、同文庫閲覧室に備え付けられている冊子目録により、閲覧が可能である。

本研究では、三井家当主として、紀州藩や表千家と深く関わった、高祐の茶の湯を明らかにすることを予定していた。しかしながら、高祐は茶会記など、茶の湯についてまとまった記録を残しておらず、「高祐日記」と題した七七冊の日記に茶会等の記事がある、ということが判明した。今回の調査では、七七冊の日記すべてを調査することは、時間的に不可能であったため、高祐を主体とする研究は断念し、次の二つの茶会記を対象とすることにした。以下、概要を述べる。

### （一）「茶之湯会附」

「茶之湯会附」は、三井惣領家である北家に伝来した、三冊の茶会記である。三冊は年代順にまとめられており、一冊目は、「安永・天明・寛政年茶之湯会附」（北二二八八）と題され、安永二年（一七七三）十月にはじまる。以下、寛政十三年（一八〇一）まで九五会を数える。二冊目は、「文化・文政茶之湯会附」（北二二八九）で、文化元年（一八〇四）から、文政七年（一八二四）の官休庵における一翁宗守一五〇年忌の茶事まで、九七会を収録する。三冊目の、「文政・天保年間茶之湯会附」（北二二九〇）は、文政八年（一八二五）にはじまり、天保八年（一八三七）までの九〇会と、三冊に六〇年間にわたる計二八二会の茶会が記録されている。いずれも、後述する高義本人が参加した、他会記である。

北家伝来ではあるが、筆者は、長井家三代の高義である。高義は、宝暦六年（一七五六）に生まれ、安永七年（一七七八）名跡を相続する。大借のため寛政十二年（一八〇〇）に隠居し、伏見に移る。茶会への参会記録は年によって多少があるが、少ない時期は諸事忙しくしていた時であった。文化二年（一八〇五）剃髪して、灌雪また邀月庵と号する。天保十一年（一八四〇）、八五歳で病没した。

高義は、「安永・天明・寛政年茶之湯会附」に記される六会目、安永三年（一七七四）十二月十五日に表千家へ入門している。この時の表千家当主は、八代啐啄齋であった。

1 財団法人三井文庫編集・発行『三井家文化人名録』二〇〇二年

2 公益財団法人三井文庫 ホームページ  
[http://mitsui-bunko.or.jp/bunko\\_data/mokuroku/mokuroku\\_index.html](http://mitsui-bunko.or.jp/bunko_data/mokuroku/mokuroku_index.html)

## (2) 「諸家茶事会席写」・「諸家茶事控」

「諸家茶事会席写」(小石川一三九一)と「諸家茶事控」(小石川一三九二)は、小石川家六代の高益によって筆写された三冊の茶会記である。「諸家茶事会席写」は、文化十二年(一八一五)と考えられる、高松公御茶にはじまり、弘化二年(一八四五)冬、千宗左(吸江齋)までの二五六会(二冊に分冊され、一冊目に一一九会、二冊目に一三七会あり)を収録するのに対し、「諸家茶事控」は、それに続く弘化三年(一八四六)から筆が起こされ、安政四年(一八五七)、裏千家十一代玄々齋により、今日庵で営まれた宗旦二〇〇回忌に至る三四会まで、三冊を合計すると、二九〇会分を載せる。先ほどの「茶之湯会附」と違って、高益の他会記ではなく、諸方でおこなわれた茶会記を収集して、記録したものであることが、特徴といえよう。

書写をおこなった三井高益は、寛政十二年に誕生、文化十二年に家督を相続する。茶の湯は、文政二年(一八一九)正月二十八日、表千家高弟の堀内家に入門している<sup>3)</sup>。文政六年(一八二三)から二十年以上にわたって、京両替店代表として切盛りし、大坂・和歌山をたびたび往復した。堀内家に入門したものの、高益がみずから亭主となつて茶会を開くことはなく、文政二年から安政四年にかけての「諸方茶事控」という他会記を残し、安政五年(一八五八)に没した。

この二つの茶会記を分析対象としたのは、高祐の自会記がなかったことが原因としてある。そのため、化政期とその前後を中心とした茶会記のうち、自ら客として参加した他会記と、自らは参会せず、他から収集した記録による茶会記を用いることで、同族間での重複を避け、様々な茶会を知ることができると考えた。

## 二、茶会記の内容と特徴

二つの茶会記の内容から、三井家と表千家・紀州藩との関係に絞ってみたい。

「茶之湯会附」には、一八一二会あり、そのうち、千宗左が亭主をつとめる会が二六会ある。初出は、安永三年四月二十日の会で、亭主の宗左は、八代啐啄齋である。以下、計八会に高義は参会した。以降は、啐啄齋から家元を継承した了々齋となる。文化十一年(一八一四)から、了々齋の没する文政八年まで、計一一会の記録がある。代替わりした吸江齋の茶会は、天保三年(一八三二)から、同八年の計六会である。

特に、寛政二年(一七九〇)の利休二〇〇年忌、文政四年(一八二二)の江岑一五〇年忌、天保八年の真台子点前伝授の披露茶会など、重要な会には必ず参会している。また、毎年十一月も多く、口切の茶会に招かれていたのだろう。客組は、いずれも三井同族、あるいは表千家高弟の堀内宗心(四代方合齋)ほか、駒沢利齋をはじめとした職方など、千家と近い人物が多くみられた。

道具組については、表千家伝来の優品が惜しみなく用いられている。重複して用いられた掛物は、石川丈山の詩と春屋宗園筆の不審庵記の二点のみであった。不審庵記だけは、啐啄・了々・吸江の三代で一度ずつみられることから、表千家において重要な位置を占めていたといえよう。

料理は、年代が下がるにつれて充実していく。啐啄齋時代は、煮物ができれば焼物はなかったが、了々齋・吸江齋は、両方出すことが多い。菓子も啐啄齋の頃は、州浜羊羹や饅頭、干菓子は松風と素朴なものであったが、了々齋は、「水井」と「寒月」(干菓子)という好みの菓子をを用いている。「水井」は、琥珀糖のなかへ白羊羹(外郎か)を入れた棹物で、小口切りにしたものと記されている。

もう一方の「諸家茶事会席写」・「諸家茶事控」には、様々な茶会の記録が集められている。なかでも、表千家や紀州藩との関係を物語る、紀州藩主に対する献茶時の会記を取り上げたい。

会記中に、紀州藩主への献茶の記録は、六会分ある。文化十三年(一八一六)と推定される了々齋、文政四年三井高祐、同十三年(一八三〇)吸江齋、同年に吸江齋の後見をつとめ、のちに紀州藩御数寄屋頭となる住山宗仙、天保十三年(一八四二)武者小路千家高弟で、紀州藩士であった木津宗詮から、自身も表千家茶道を極めた、十代藩主治宝への献茶と、弘化三年、吸江齋から新藩主となったばかりの十二代藩主斉彊への献茶である。

文化十三年と弘化三年の献茶は、江戸でおこなわれたが、文化の時は京都の表千家から道具を持参して、茶通箱の点前を披露している。茶会が開かれた十月七日という日付と、茶杓に如心齋銘元日が使われていることから、口切であろう。弘化の時は、「御掛物」以下、すべて道具に「御」の字が付けられていることから、紀州藩で所蔵していた道具での茶会であった。

むすびに

以上、三井文庫所蔵の茶会記から、表千家と紀州徳川家に関係する茶会を抽出し、分析をおこなった。その結果、表千家における茶の湯は、使う道具こそ大きな変化はないものの、料理や菓子については、流通や調理技術の向上、砂糖の国産化成功という社会的背景もあつて、現在の懐石に近付いていたといえよう。また、藩主への献茶は、御数寄屋頭としてのつとめであり、京都から道具を持参する場合と、紀州藩の道具を使う場合の両方があつたことが判明した。

谷端昭夫氏は、『茶道聚錦一』<sup>4</sup>のなかで、「近世・近代茶道史研究の課題」として、「江戸、大坂、京都など都市および全国城下における茶の湯の実体の把握」をあげ、「各地の商人や豪農層における茶の受容についての考察」の必要性を説いておられる。近世後期における、三井家周辺の茶の湯の実態を明らかにすることは、同時代の商人における茶の受容を知るうえで不可欠のものであり、明治以降も続く、三井財閥と茶の湯の関係を考えるうえでも重要な意味を持つ。つまり本研究は、これまで進めてきた近世後期における表千家の茶の湯を中心とした様相解明を補完するものであり、研究史の空白を埋める意義あるものといえよう。

また、今回の調査で、三井文庫には紀州藩主徳川治宝が、参勤交代の途次に、三井家別邸の稲荷町屋敷に立ち寄りした記録を見出した。将軍家斉以降盛んになる、立ち寄り（実際には御成だが、訪問先の負担を減らし、気軽に外出できるよう「立寄」と称したと推定している）では、数寄屋御成に準じた茶の室礼がおこなわれていたことから、今後、立ち寄りについても調査を進め、近世初期との比較研究にも着手したい。